

## 廃墟の和歌

青木真知子

### はじめに

和歌において、廃墟と化した宮都が詠まれたのは、万葉集を最初とする。万葉集中の柿本人麻呂による「近江荒都歌」<sup>(1)</sup>（巻一、二九〇三二）が、和歌史上の最初の荒廃した都の歌とされている。

万葉の時代、天皇の宮である宮都は、飛鳥・難波・近江・藤原京・平城京・恭仁宮と多くの地を移った。推古天皇から聖武天皇にいたる歴代天皇の宮は次のようになる。

推古天皇	豊浦宮	小墾田宮
舒明天皇	岡本宮	田中宮
皇極天皇	飛鳥板蓋宮	百濟宮
孝德天皇	難波長柄豊碇宮	
齐明天皇	板蓋宮	川原宮
天智天皇	大津宮	後岡本宮
天武天皇	飛鳥清御原宮	吉野宮（離宮）
持統天皇	藤原京	
文武天皇	藤原京	
元明天皇	藤原京	平城京

元正天皇 平城京

聖武天皇 平城京 恭仁宮 難波宮 紫香樂宮(離宮)

これらの宮都のうち、万葉集において、荒廃した都としての表現が用いられているのは、近江大津宮、平城京、恭仁宮である。このほか、草壁皇子の住居であった鳥宮も、その荒廃が、人麻呂による「日並皇子挽歌」(卷二、一六七～一六九)や、皇子の舍人たちによる「舍人働傷歌」(卷二、一七二～一九三)によって歌われている。これに対して、恒久不変のものとして宮を讃える宮廷讃歌には、柿本人麻呂の吉野讃歌(卷一、三六～三九)、山辺赤人の吉野讃歌(卷六、九三三～九三五)・難波讃歌(卷六、九三三～九三四)、笠金村の養老七年吉野讃歌(卷六、九〇七～九二二)・神亀二年吉野讃歌(卷六、九二〇～九三二)・難波讃歌(卷六、一〇六二～一〇六四)、大伴旅人の吉野讃歌(卷三、三二五～三二六)、大伴家持の吉野讃歌(卷六、一〇五〇～一〇五二、一〇五三～一〇五八)・難波讃歌(卷六、一〇六二～一〇六四)、大伴旅人の吉野讃歌(卷三、三二五～三二六)、大伴家持の吉野讃歌(卷十八、四〇九八～四一〇〇)などのほか、藤原宮を讃えた「藤原宮の役民の歌」(卷一、五〇)、「藤原宮の御井の歌」(卷一、五二・五三)などがみえている。

宮廷讃歌の本質は、王権の地の恒久の生命力の維持を願う呪歌の性質をもつことにあり、その起源は国見歌に求められる。古くは『古事記』<sup>(3)</sup>に倭建命の歌と伝える、

倭は 国のまほろば たたなづく 青垣 山隠れる 倭しうるわし(古事記、三二)

の例があり、これを、「もとは独立の国ほめ歌で、国見の儀礼の寿歌と考えられるものである」とされたのは土橋寛氏である。<sup>(4)</sup>万葉集においても、第十三代舒明天皇の作と伝える次の歌がその例としてよく知られている。

天皇、香具山に上りて望国したまふ時の御製歌

大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は 煙立ち立つ 海原は かまめ立ち立つ うまし 国ぞ あきづ鳥 大和の国は(卷二、二二)

「国見」は、万葉集では、「望国」「国看」とも表記されており、この「国見」の詞章に伴って歌われるのが国見歌と呼ばれるものである。国見歌の表現形式は、瞩目景物を列挙する型と、対象を称揚する型とに分けられるが、万葉集の宮廷讃歌においても、自然を観照的に見る叙景歌と、天皇に対する祝的、儀礼的な讃歌との二面性が認められる。

「廃都」を素材とした和歌においても、その発想の基には、このような、古代歌謡の伝統を受け継ぐ宮廷儀礼歌の性格を備えた宮廷讃歌

の存在が考えられるだろう。しかしながら、人麻呂によって、廢墟と化した旧都、すなわち「荒都」を詠んだ歌が生まれた背景には、自然と王権への呪的讚美の世界から脱して、新しく、現実の世界にある自然と人事とを抒情の対象としようとする表現意識をみることができるとではないだろうか。時間の流れとそれのもたらす荒廢を象徴するところの廢墟を表現の対象とする和歌意識は、現実を認識する知性とそれを表現の対象としうる創造性によって生み出されたものであったのではあるまいか。本稿では、このような現実に対峙する精神によって生み出されたと考えられる、抒情の対象としての廢墟について考えてみたい。

—

万葉集中の「荒都」という漢語の用語は、柿本人麻呂の「近江荒都歌」の題詞に、「過<sub>二</sub>近江荒都<sub>一</sub>時、柿本朝臣人麻呂作歌」とあるのが唯一の例である。

近江の荒れたる都に過るときに、柿本朝臣人麻呂が作る歌

玉だすき 畝傍の山の 樞原の 聖の御代ゆへ或は云ふ、「宮ゆ」生れましし 神のごごと つがの木の いや継ぎ継ぎに 天の下  
 知らしめししをへ或は云ふ、「めしける」 天にみつ 大和を置きて あをによし 奈良山を越えへ或は云ふ、「そらみつ 大和を置き あを  
 によし 奈良山越えて」 いかさまに 思ほしめせかへ或は云ふ、「思ほしけめか」 天離る 鄙にはあれど 石走る 近江の国の 楽浪  
 の 大津の宮に 天の下 知らしめしけむ 天皇の 神の尊の 大宮は ここと聞けども 大殿は ここと言へども 春草の繁く生ひ  
 たる 霞立ち 春日の霧れるへ或は云ふ、「霞立ち 春日か霧れる 夏草か 繁くなりぬる」 ももしきの 大宮所 見れば悲しもへ或は云ふ、  
 「見ればさぶしも」(卷一、二九)

反歌

楽浪の志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ(卷一、三〇)

楽浪の志賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも(卷一、三一)

これは、壬申の乱によって、近江大津宮がわずか十年ほどで廢都となつてから、ほぼ二十年近くを経た、持統朝の初頭のころ、人麻呂がいよいよ荒廢のすすんだ旧都の地を訪れて詠んだ歌である。天智天皇によって、それまでの後岡本宮から近江の大津宮への遷都が行われたのは、天智六年(六六七)のことであった。伝説上の古代天皇の時代を除くと、皇居が大和以外に定められた例はなく、人々の間に不穏な空

気があったことは、『日本書紀』<sup>5)</sup>天智六年三月の記事「三月の辛酉の朔己卯に、都を近江に遷す。是の時に、天下の百姓、都遷すことを願はずして、諷へ諫く者多し。童謡亦衆し。日日夜夜、失火の處多し」にも伝えられている。

人麻呂の長歌は、大和の橿原の地で即位した神武天皇以来の皇統から歌い起こし、天智天皇の近江遷都を、神武以来かつてなき異例の事業として描く。そして、本来の王権の地大和を離れた大津宮の、荒廃への嘆きにいたるのである。長歌にある「天の下 知らしめししを 天にみつ 大和を置きて」の意味は、「代々の天皇が天下をお治めになった大和の国をすてて」と理解される。「知らしめししを」は、「お治めになったのに」と解すると歌意がわかりにくくなるので、「を」を間投助詞とみて、「知らしめしし 大和を置きて」の意にとるべきであろう。「いかさまに思ほしめせか」は、遷都を実行した天皇の真意を図りかねる気持を歌ったものとなる。ここでは、大津宮が廃墟となった原因は、神武天皇が即位した理想的な土地を捨てて、「天離る鄙」である近江に遷都した結果、神の心が衰退したことだと解釈されていることになる。

第一反歌は、そこに存在したはずの「大宮人」の不在をいい、第二反歌では、それを「昔の人」と表現することで、さらに大きな時間の経過のなかの不在の確認へと展開させている。

人麻呂の表現例に即して言えば、神の意志に背く事業に対する不審の念の表明である「いかさまに思ほしめせか」の用例は、「日並皇子挽歌」にも使われている。

日並皇子尊の殯宮の時に、柿本朝臣麻呂が作る歌一首併せて短歌

天地の 初めの時の ひさかたの 天の河原に 八百万 千万神の 神集ひ 集ひいまして 神はかり はかりし時に 天照らす 日  
女の尊へ一に云ふ、「さしあがる 日女の尊」 天をば 知らしめすと 葦原の 瑞穂の国を 天地の 寄り合ひの極み 知らしめす 神  
の尊と 雨雲の 八重かき分けてへ一に云ふ、「天雲の 八重雲分けて」 神下し いませまつりし 高照らす 日の皇子は 飛ぶ鳥の  
清御原の宮に 神ながら 太敷きまして 天皇の 敷きます国と 天の原 石門を開き 神上り 上りいましてぬへ一に云ふ、「神登り  
いまししかば」 我が大君 皇子の尊の 天の下 知らしめしせば 春花の 貴からむと 望月の たたはしけむと 天の下へ一に云  
ふ、「食す国」 四方の人の 大船の 思ひ頼みて 天つ水 仰ぎて待つに いかさまに 思せしめせか つれもなき 真弓の岡に  
宮柱 太敷きいまし みあらかを 高知りまして 朝言に 御言問はさず 日月の まねくなりぬれ そこ故に 皇子の宮人 行くへ  
知らずもへ一に云ふ、「さす竹の 皇子の宮人 行くへ知らず」(卷二、一六七)

反歌二首

ひさかたの天見るごとく仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも(巻二、一六八)

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも(或本は、件の歌を以て後の皇子尊の殯宮の時の歌の反とせり)(巻二、一六九)

「日並皇子挽歌」は、持統三年(六八九)に薨じた皇太子草壁皇子の、殯宮のときに作られた歌である。長歌の前半はもっぱら天武天皇を歌うことに費やされている。そこで示されているのは、天武天皇の王権の神聖化の物語である。世界のはじめのときに神々が、統治を、天の「日女の尊」と地上とに分けた、その定めを受けて、天武天皇が神下ったというのである。天武以前にも天皇は存在したが、天武天皇こそ、「天地の初めの時」から連続と続いて揺るぎない皇統をはじめてなう正当な存在であったという叙述が示すものは、天武天皇の神聖化への志向である。長歌の後半、「我が大君皇子の尊の」以下が、草壁皇子について語られる部分で、皇子は何よりも天武の皇統を継ぐものとして位置づけられるのである。皇子の即位は、先祖は神、父は天武という皇統に結びつけて、天地開闢の時の神々の協議によって決定づけられており、天武の崩御を受けて即位するはずであったその期待が潰えたことの心惑いの表明が、「いかさまに思せしめせか」の意味であろう。皇子は、神として降臨した天武天皇を継ぎえなかつたことを惜しまれているのである。

第一反歌は、皇子の御殿である島宮が、主の不在によって荒れてゆくだろうことを嘆くものだが、後に載る舎人の歌「高光る我が日の皇子のいましせば島の御門は荒れざらましを」(巻二、一七三)では、「荒れまく」というその予感が現実のものとなったことが示されている。「近江荒都歌」と「日並皇子挽歌」はともに、天武天皇の神聖化による王権の強化という時代精神をになって歌われたものだと考えられる。その王権の永続性への希求という構図から、こぼれ落ちた事象があった。それが、荒廃するかつての宮所という場所なのであろう。荒廢の原因は、住むべき主の不在にあり、その不在は、律令時代の意志から見放されたことに求められよう。

このように、人麻呂によって歌われた大津宮と島宮の廢墟は、「本来存在すべき主の不在」という特性を有するが、そこには朽ちた柱や崩壊した建物といった具体的実景は伴われていない。二九番の歌にある「春草の 繁く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる」は、山部赤人の葛飾真間手児名を歌った四三一番の「真木の葉や 茂りたるらむ 松が根や 遠く久しき」という墓所の描写と同様に、象徴的表現と理解されるものである。

人麻呂は、このほかにも、近江の廢都での感慨を詠んだ次のような歌を残している。

柿本朝臣人麻呂、近江国より上り来る時に、宇治河の辺に至りて作る歌一首

ものふの八十字治川の網代木にいさよふ波の行くへ知らずも(巻三、二六四)

柿本朝臣人麻呂が歌一首

近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに古思ほゆ(巻三、二六六)

二六四番の歌は、題詞によれば近江国から都へ上る途中の詠であったことになるから、「近江荒都歌」と何らかの関連をもつものであることが推測される。この歌は、新古今集に採られており、「網代木にいさよふ波」の表現は、慈円の「網代木にいさよふ波の音更けてひとりや寝ぬる宇治の橋姫」(新古今集、巻六、冬歌、六三七)にひきつがれている。また、大江匡房の「ささ浪や近江の海の網代木に浪とともにや水魚のよるらむ」(堀河百首、一〇二六)などの歌もあり、人麻呂が、網代木の波に託した近江旧都への懐旧の情は、後代の歌人によって新たな抒情へと展開されていることが確認できる。

二六六番の歌は、題詞からは成立の事情を知ることにはできないが、「古思ほゆ」は、近江旧都への懐旧とみなされ、「近江荒都歌」と同じ時期の作ではないかともいわれている。ただ近江への距離のとりかたにおいては、両者の間に違いがみられる。荒都歌の三一番の反歌では、「昔の人にまたも逢はめやも」と「昔」の語が使われている。「むかし」は、時間的には現在に近い過去と考えられる。それに対して、二六六番でいう「いにしへ」は、現在から隔絶した遠い過去を意味するものであろう。荒れ果てた現実の廃墟を近景として見捨てられた旧都に心を寄せたのが三一番の歌であり、近江旧都をはるか遠景において、夕刻の湖畔に鳴く千鳥の哀切な泣き声に過ぎ去った時間の無常をたどるのが二六六番の歌であろう。いずれにしても、「廃墟」そのものへの具体的情景描写はなく、廃墟の風景は象徴性をもって成立しているものであることが指摘できる。

## 二

廃墟となった近江大津宮を題材にした歌は、万葉集には、人麻呂のほかにも、高市黒人によるものがある。

高市古人、近江の旧堵を感傷して作る歌 或書に云はく、高市連黒人なりといふ

古の人に我あれや楽浪の古き京を見れば悲しき(巻一、三三二)

楽浪の国つ御神のうらさびて荒れたる京見れば悲しき(巻一、三三三)

高市連黒人が近江の旧き都の歌一首

かく故に見じと言ふものを楽浪の旧き都を見せつつもな(卷三、三〇五)

右の歌、或本に曰く、小弁の作なり、といふ。未だこの小弁といふ者を審らかにせず。

人麻呂の「近江荒都歌」に続いて配置されている、三三・三三番の歌は、題詞に「高市古人」とあるが、黒人作と認められるものである。近江旧都に立ち寄った作と題詞にある三〇五番も、左注には作者の異伝が記されているが、これも黒人の歌と考えるのが妥当であろう。

黒人は、正史に記載がなく経歴は未詳であるが、持統・文武天皇のころに活躍した歌人であることは、その作歌から知ることができる。天武・持統を「天つ神」の正統の継承者として神聖化する時代にあつては、三三番に歌われている「国つ神」はあだし神とみなされよう。廢都悲傷の歌は、宮廷讚歌を反転させたものであり、鎮魂などの意義をもつ儀礼歌の側面は否定できない。しかし、黒人の歌にみる「見れば悲しき」(三三番)、「見れば悲しも」(三三番)、「かく故に見じ」(三〇五番)の表現は、現実に荒都を見てそこに懐旧の情が湧き起っていることを示すものと受け取れる。三三番で「古の人」と歌われているのは、黒人からみて近江旧都は、はるかに時間の隔絶した過去という認識の現れとみることができる。また、廢墟となった「荒れたる京」は、題詞に「旧堵」「旧き都」とあるように、かつての都、すなわち宮殿のあつた場所を指すものだと考えられるのである。抒情の対象である荒廢した近江大津宮は、時間の経過のあなたに存在するが決して抽象的な場所ではなく、現実の宮殿跡という廢墟として描かれているといつてよいだろう。

近江大津宮へ遷都した時に作られたとされる額田王の歌は、宮廷儀礼歌にあげられものである。

額田王、近江国に下る時に作る歌、井戸王の即ち和ふる歌

味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際に い隠るまで 道の隈 い積もるまでに つばらにも 見つつ行かむを しばしばも 見放けむ山を 心なく 雲の 隠さふべしや(卷一、一七)

反歌

三輪山を然も隠すか雲だにも心あらなも隠さふべしや(卷一、一八)

右の二首の歌は、山上憶良大夫の類聚歌林に曰く、「都を近江国に遷す時に、三輪山を御覧す御歌なり」といふ。日本書紀に曰く、「六年丙寅の春三月、辛酉の朔の己卯に、都を近江に遷す」といふ。

長歌は、遷都のため大和を去るにあたって、大和の王権の象徴である三輪山をもって歌い起こされている。そして、国境の奈良山から、三輪山を見ることで大和への愛着を伝え、その三輪山を心なく妨げる雲への「隠さふべしや」という婉曲な禁止で結ばれる。奈良山は、そ

こまでが大和という自分たちの世界の区切りを示す場所となっていてるのである。反歌とされる一八番の歌の内容は、本来心なき雲に心あれかしと願うものであるが、古今集<sup>(8)</sup>にある紀貫之の「三輪山をしかも隠すか春霞人に知られぬ花や咲くらむ」(古今集、卷二、九四)は、この歌を踏まえてのものであろう。

この歌については、左註に山上憶良の類聚歌林の説として、「遷<sup>二</sup>都近江国<sup>一</sup>時、御<sup>二</sup>覽三輪山<sup>一</sup>御歌焉」とあることから、天智天皇の作とする異伝が生じている。近江遷都の計画に対しては、天下の百姓の間に批判のあったことは、『日本書紀』の記事にみたとおりである。それにもかかわらず、批判を押し切って遷都を決行したのは、唐の水軍の脅威に備えての、政治的、軍事的措置と考えられている。六六三年の白村江の敗戦の後、六六四年、六六五年と相次いで唐使の来朝があり、朝廷には緊迫した空気が漲っていた。各地に城が築かれ、水城も造られた。遷都の地に大津が選ばれたのも、淀川を通じて瀬戸内海につながることを目的としたからだともいう。そうした状況なかで、天智天皇自身が、三輪山に別れを惜しむ歌を作ったと解するのは、不自然であろう。これは、代々の天皇の宮居であった大和の地を離れることに対する、宮廷の人々の間で共有されていたところの感情を、額田王が代弁した代作歌であろうと思われる<sup>(9)</sup>。

歌の内容については、伊藤博氏はこれを「国偲び歌」と捉え、遷都の途上での国境の奈良山における大和の国魂鎮魂儀礼歌とされている。国偲び歌(記では「国思歌」、紀では「国邦歌」)は、故郷を偲んで作った歌の意味で、シノフには、時間的、空間的に遠いものを恋慕う意と、讚美の意の両方の意味がある。ここに示されているのは、近江に下る宮廷人の、大和に対する共通感情とみてよいだろう。三輪山は、宮廷人にとって、畏怖と敬愛と信仰の対象となる特別な場所である。大和の王権は、三輪山の神を祭ることによって成り立つものでもあった。その三輪山との訣別の歌は、大和に対する共同体の望郷の念をかたちにしたものといえよう。

大和の王権の象徴であり、宮廷人の故郷の象徴である三輪山への、集団的、儀礼的呪歌の性格をもつこの額田王の歌からうかがえるのは、大和の神聖視という古代感情である。天武・持統朝にみる王権の正当性の主張には、この大和の神聖視が伴う。そのことは、聖地である大和を離れた近江大津宮がわずか十年で廃都となり、壬申の乱の後、天武天皇によって再び飛鳥に宮都が戻されたことでも説明されるだろう。

天武天皇の宮都飛鳥清御原宮は、天武元年(六七二)に「明日香の真神の原」(万葉集、卷三、一九九)の周辺に築かれた。天武天皇によるその造営は、万葉集中の「壬申の年の乱の平定まりにし以後の歌二首」の詞書のある、「大君は神にしませば赤駒の腹這ふ田居を都と成しつ」(卷一九、四二六〇)「大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を都と成しつ」(卷一九、四二六二)の歌の「大君は神にしませば」の表現が示すよ



うに、まるで神の行為のようだと歌われているのである。天武天皇の跡を継いだ持統天皇も、持統八年（六九四）の藤原京遷都まで、清御原宮にて執政を行っている。山部赤人が神岳に登った時に作られた歌である万葉集の三二四・三二五番は、飛鳥の風景への讚美を内容とするものである。そこに歌われた「明日香の古き都」は、天武・持統の宮都跡を指すとされる。このことから、藤原宮を新都に定めた後も、人々にとって清御原宮をはじめとする大和飛鳥が懐旧の念を強く抱かせる聖地であったことがうかがわれる。この大和の神聖視という古代感情を背景にみると、廢墟と化した近江大津宮の和歌が、純粋な叙景歌ではなく象徴性をもつものであることは、当然の帰結と考えられるのである。

三

藤原宮への遷都後、旧都となった明日香宮への懐旧の情は、天智天皇の第七皇子である志貴皇子によっても歌われている。

明日香宮より藤原宮に遷居りし後に、志貴皇子の作らす歌

采女の袖吹き返す明日香風京を遠みいたづらに吹く（万葉集、卷一、五二）

この歌が詠まれたのは、明日香宮から藤原宮へ移って間もなくのころかと思われる。風にきらびやかに吹きなびく袖は、幻影のなかの采女の姿である。作者が現実を目にしているのは、明日香の廢都の風景と、そこをむなしく吹き渡る明日香風のみである。都の繁栄を象徴する色鮮やかな采女の幻影の姿が、目の前の廢都に寄せる作者の懐旧の情をますます切実で深いものに見せる効果をあげている。

万葉集では、このほかに、和銅三年（七二〇）に、藤原京から平城京へ遷都する際の、慣れ親しんだ藤原宮に対する愛惜の歌も残されている。

和銅三年庚戌の春二月、藤原宮より寧楽宮に遷る時に、御輿を長屋の原に停め古郷を廻望みて作らす歌一書に云はく、太上天皇の御製  
飛ぶ鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむへに云ふ、「君があたりを見ずてもあらむ」（卷一、七八）

この歌は、題詞によれば、元明天皇御製であるが、「一書」は、持統太上天皇御製とする。これを正しいとするならば、もとは、明日香京から藤原京への遷都の際の持統御製で、元明天皇はその古歌を歌い変えたということになる。「君」は、持統御製ならば亡夫天武天皇、元明御製としては、亡夫草壁皇子、もしくは子の文武天皇などが想定される。「あたり」「見」と歌うのは、国見の儀礼的望郷歌の類型を踏襲したものである。「あたり」でよいから見たいのに、それすら見えなくなりはずまいかという心情表現は、せめて国境を越えるまでは

大和の象徴である三輪山を見たいとの希求を表明した、額田王の三輪山の歌(卷二、一七・一八)に通じるものであろう。

和銅三年(七二〇)三月、元明天皇によって、藤原京から平城京への遷都が行われた。万葉集では「寧楽」とも表記される平城京は、桓武天皇が延暦三年(七八四)に長岡京に遷都するまで、元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・称徳・光仁・桓武天皇の八代にわたる宮都であった。

それゆえか、天平十二年(七四〇)から同十七年(七四五)の一期に、恭仁宮・難波宮に遷都した際の人々の落胆は大きく、平城京の荒廢を、「傷み惜しみ」あるいは「悲しむ」、次のような歌が詠まれた。一〇四四番から一〇四六番は作者不詳歌だが、一〇四七番から一〇四九番の作者は田辺福麻呂とされる。

奈良の京の荒墟を傷み惜しみて作る歌三首作者審らかならず

紅に深く染みにし心かも奈良の都に年の経ぬべき(卷六、一〇四四)

世の中を常なきものと今ぞ知る奈良の都のうつろふ見れば(卷六、一〇四五)

石つなのまたをち返りあをによし奈良の都をまたも見むかも(卷六、一〇四六)

奈良の故郷を悲しびて作る歌一首并せて短歌

やすみしし 我が大君の 高敷かず 大和の国は 天皇の 神の御代より 敷きませる 国にしあれば 生れまさむ 御子の継ぎ継ぎ  
 天の下 知らしまさむと 八百万 千年をかねて 定めけむ 奈良の都は かぎろひの 春にしなれば 春日山 三笠の野辺に 桜花  
 木の暗隠り かほ鳥は 問なくしば鳴く 露霜の 秋さり来れば 生駒山 飛火が岡に 萩の枝を しがらみ散らし さ雄鹿は 妻呼  
 びとよむ 山見れば 山も見が欲し 里見れば 里も住み良し もののふの 八十伴の男の うちはへて 思へりしくは 天地の 寄  
 り合ひの極み 万代に 栄え行かむと 思へりし 大宮すらを 頼めりし 奈良の都を 新時代の 事にしあれば 大君の 引きのま  
 にまに 春花の うつろひ変はり 群鳥の 朝立ち行けば さす竹の 大宮人の 踏み平し 通ひし道は 馬も行かず 人も行かねば  
 荒れにけるかも(卷六、一〇四七)

反歌二首

立ち変はり古き都となりぬれば道の芝草長く生ひにけり(卷六、一〇四八)

なつきにし奈良の都の荒れ行けば出で立つごとに嘆きし増さる(卷六、一〇四九)

天平十二年(七四〇)十月、聖武天皇は、大宰府の藤原広嗣による謀反が都の政情へ影響を与えることを避けるために、伊勢に行幸し、そ

のまま恭仁の新京へと遷った。そのため、「咲く花の薫ふがごとく」(万葉集、卷二、三三八、小野老)と歌われた平城京も、天平十三年(七四二)の夏以降は、わずかの間にすっかり荒廃したとみられる。一〇四四番〜一〇四六番の読人不知の詠は、その荒廃に対する人々の嘆きを歌ったものとなっている。一〇四五番にみる「うつろふ」は、好ましくない状況に変化してゆくことを意味する動詞であるから、華やかに栄えた宮都が、住むべき主を失い、見捨てられてむなしく衰微してゆくことへの無念さの表明と理解される。福麻呂作の三首も同じく旧都の荒廃を悲傷する歌で、作者は、一〇四八番の反歌の「立ち変はり」の句に万物流転の実相を嘆じ、荒都の現実を「道の芝草長く生ひにけり」と具体的叙景で表現している。

聖武天皇の恭仁京は、わずか三年あまりで廢都となったが、万葉集では田辺福麻呂による新造の恭仁京を称える歌がある一方で、同じく福麻呂によってその荒廃を嘆く次のような歌が作られている。

三香原の荒墟を悲傷して作る歌一首并せて短歌

三香原 久邇の都は 山高み 川の瀬清み 住み良しと 人は言へども あり良しと 我は思へど 古りにし 里にしあれば 家も荒  
れたり はしけやし かくありけるか 三諸つく 鹿脊山のまに 咲く花の 色めづらしく 百鳥の 声なつかしき ありが欲し 住  
み良き里の 荒るらく惜しも(卷六、一〇五九)

反歌二首

三香原久邇の都は荒れにけり大宮人の移ろひぬれば(卷六、一〇六〇)

咲く花の色は変はらずもしきの大宮人ぞ立ち変はりける(卷六、一〇六一)

聖武天皇が、恭仁京から再び平城京に遷幸したのが天平十七年(七四五)の五月とされるので、この三首が詠まれたのはそれ以降のことであろう。ここでは、旧都の美しい自然と、大宮人の不在のもたらす廢都の描写のなかに、変わらぬ自然と、変転する人の世の無常とが対比されていることになる。福麻呂は、その作歌活動のなかに、平城京、恭仁京の旧都悲傷歌や、恭仁新京、難波宮の讚歌など、宮廷儀礼歌とみなされる作品が含まれていることから、人麻呂・赤人の系譜を継ぐ最後の宮廷歌人との位置づけに置かれることもある。また、左大臣橘諸兄の庇護を受けた職業歌人であった可能性も指摘されている<sup>11)</sup>。

万葉集に歌われた廢墟の多くは、宮廷儀礼歌にその用例があり、表現内容は古代への憧憬や過去への懐旧を含む共同体の感情をかたちにしたものが原型であろう。その感情表現の対象は、遷都後の旧都の荒廢である。そこは、見放され、放置された場所であった。人は廢墟を

見て、あらがえぬ時間の流れを思い知らされる。時は流れ行くものであり、すべての人の世の現象は過ぎ去ってゆく。さびれた都という廃墟では、建物は朽ち、放置された庭には草が生い茂り、池はにごる。しかしそれらは、具体的実景として描かれるのではない。万葉集の廃墟表現は、自然のなかに移行行く人の世の無常が象徴的に描かれているのを特徴とするといえるだろう。旧都の荒廢の風景に、時間の流れと人の世の無常を自覚したとき、廢墟の和歌は宮廷儀礼歌にとどまらず、現実を認識する知性とそれを表現の対象としうる創造性によって、自然と人事を内包する叙景歌へと展開したと考えられるのである。

荒廢した旧都は、平安時代中期以降には歌枕として詠まれるようになってゆく。志賀の都を偲ぶ歌としては、平忠度の作と伝えられている有名な「ささなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな」(千載集、卷一、春上、六六)の歌をはじめ、祝部宿禰成仲の「ささなみや志賀の花園見るたびに昔の人の心をぞ知る」(同、六七)、新古今集に載る良經の「明日よりは志賀の花園まれにだにたれかは訪はむ春のふるさと」(卷二、春歌下、一七四)などがあげられる。

奈良の都も数多く詠まれており、古今集には、平城天皇御製「故里となりし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり」(卷二、春歌下、九〇)、二条(源至の娘)作「人ふるす里をいとひて来しかども奈良の都も愛き名なりけり」(卷十八、雑歌下、九八六)などがみえているほか、後撰集の読人不知の歌「身ははやく奈良の都となりしを恋しきことのまたも古りぬか」(卷九、恋一、五六〇)、詞花集の伊勢大輔の歌「いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重にほひぬるかな」(卷一、春、二九)などもその用例である。伊勢大輔の歌にはこまかい詞書があり、その大意は、中宮彰子のもとに毎年奈良の寺から桜の花が届けられるのだが、受け取る役を紫式部が新参の伊勢大輔にゆずったとき、その場にいた藤原道長から歌を詠んで受け取れと命じられて詠んだ歌だ、というのである。「いにしへ」と「けふ」、「八重」と「九重」との対比のうちに、古都の桜を讃えるとともに、平安京の宮廷の繁栄をうたいあげたこの歌は、中宮の御前を飾るのにふさわしい宮廷歌として高く評価され、百人一首にも採られている。藤原清輔の『袋草紙』<sup>(15)</sup>には、中宮の御前での出来事が「万人感嘆、宮中鼓動」したと記されている。慈円、家隆、定家らの新古今歌人にも、奈良の都を詠んだ次のような歌をみることができる。

禁中

ここのへにほふみはしの桜こそ奈良の都になほまさりけれ(拾玉集、第二、詠百首和歌、雑、一四八)<sup>(16)</sup>  
奈良の都かすがの里に我ゆかば知るよしすべき人のなきこそ(拾玉集、第五、五三二)

雑十五

いにしへのいくよの花に春暮れて奈良の都はうつろひにけん（壬三集<sup>(17)</sup>、中、為家卿家百首、二三九）

古今の一句をこめて春の歌読み侍りしに

ひとしほのたえまの松もあをによき奈良の都の花桜かな（壬三集、下、春部、二二六八）

春廿首

あをによし奈良の都の玉柳色にもしるく春はきにけり（拾遺愚草<sup>(18)</sup>、春日同詠百首応製和歌、一三〇九）

定家には、恭仁の都を詠んだ歌「みかのはら恭仁の都の山越えて昔や遠きさをしかの声」（拾遺愚草、上、内大臣家百首、一一三二）も残されている。

古今集以降には、このような旧都の廢墟を主題とする歌だけではなく、人が住まなくなつて荒れている家という「廢墟」を詠んだ歌も現われてきている。

荒れにけりあはれいく世の宿なれや住みけむ人のおとづれもせぬ（古今集、卷十八、雑歌下、九八四、読人不知）

奈良へまかりける時に、荒れたる家に女の琴をひきけるを聞きて、よみて入れたりける

わび人の住むべき宿と見るなへに歎きくははる琴の音ぞする（古今集、卷十八、雑歌下、九八五、良岑宗貞）

あれはてて人も侍らざりける家に、さくらのさきみだれて侍りけるを見て

浅茅原主なき宿の桜花心安くや風に散るらむ（拾遺集<sup>(19)</sup>、卷一、春、六二、惠慶法師）

廢墟の和歌におけるこのような現象は、万葉集でその達成をみた、時間推移のなかに現実を認識する知性とそれを表現の対象としうる創造性によるものと考えられるのである。

【注】

(1) 万葉集の引用は、日本古典文学全集（小学館）による。歌番号もそれに従う。また、特に断らない限り、以下の万葉集の引用も同様である。「近江荒都歌」について参照とする先行研究は次のとおりである。

① 益田勝実「柿本人麻呂の抒情の構造―その一、反歌の特色―」（『日本文学』昭32・2）

② 清水克彦「近江荒都の歌」（『万葉』27、昭33・4。「柿本人麻呂―作品研究」風間書房、昭40）

- ③伊藤博「近江荒都歌の文学史的意義」〔万葉〕54・55、昭40・1、4。『万葉集の歌人と作品』上、塙書房、昭50)
- ④吉田義孝「柿本人麻呂における近江朝と持統朝」〔国語と国文学〕昭47・10)
- ⑤神野志隆光「近江荒都歌論―主題と方法」〔論集上代文学〕九、昭54)
- ⑥清水克彦「近江荒都歌型の継承」〔女子大國文〕93、昭58・9。『万葉雜記帳』桜風社、昭62)
- ⑦梶川信行「感傷近江 旧堵作歌」〔日本文学〕平2・8)
- ⑧森朝男「近江荒都歌の風土学」〔万葉の風土と歌人〕雄山閣、平3)
- (2) 飛鳥にあつた鳥宮は、蘇我馬子の邸宅だったものを代々の天皇が受け継いだと考えられ、天武朝には草壁皇子の宮殿となっていた。『日本書紀』の「推古紀」三十四年の条に、蘇我馬子が庭に池を作りその中に小島を設けたことから、馬子を島大臣と呼んだとある。
- (3) 『古事記』の引用は、日本古典文学大系(岩波書店)による。歌番号は、国歌大観番号に従う。
- (4) 土橋寛『古代歌謡全注釈 古事記編』(角川書店、昭47)
- (5) 『日本書紀』の引用は、日本古典文学全集(小学館)による。
- (6) 新古今集の引用は、日本古典文学全集(小学館)による。歌番号もそれに従う。
- (7) 堀河百首の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。
- (8) 古今集の引用は、日本古典文学全集(小学館)による。歌番号もそれに従う。
- (9) 額田王の近江遷都時作歌については、代作問題のほか、作歌時、題詞の解釈、儀礼歌としての歌の内容などをめぐって、諸説が提示されてきている。代作問題について参照とする先行研究は次のとおりである。
- ①折口信夫「額田王」〔折口信夫全集〕九、中央公論社、昭30)
- ②谷馨「額田王」(早稲田大学出版部、昭35)
- ③伊藤博「代作の傾向」〔国語国文〕、昭32・12。『万葉集の歌人と作品』上、塙書房、昭50)
- ④中西進「額田王論」〔東京学芸大学研究報告〕一三、昭37・2。『万葉集の比較文学的研究』桜風社、昭38)
- ⑤清水克彦「初期万葉の創造的世界」〔万葉〕54、昭40・1。『万葉論集』桜風社、昭45)
- (10) 伊藤博「代作の傾向」〔国語国文〕、昭32・12。『万葉集の歌人と作品』上、塙書房、昭50)

- (11) 橋本達雄『万葉宮廷歌人の研究』（笠間書院、昭50）
- (12) 千載集の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。
- (13) 後撰集の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。
- (14) 詞花集の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。
- (15) 『袋草紙』の引用は、日本歌学大系第二巻所収、袋草紙、上巻、雑談の項による。
- (16) 拾玉集の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。
- (17) 壬二集の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。
- (18) 拾遺愚草の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。
- (19) 拾遺集の引用は、新編国歌大観による。歌番号もそれに従う。表記は、適宜に漢字表記を施している。